

「見かけと実質を見極めることが大切です」

わたしはこの言葉に、大きな感銘を受けました。この言葉は、東京での研修の1日目、8月3日の夕食の後に開かれた、仙台第二高等学校の卒業生、つまり私たち在校生から見た先輩方との貴重な交流ができるOB・OG懇談会で拝聴したものです。言葉のまま受け取るとするならば、それは言わば当たり前の、ありふれたものですらあって、心を動かされるなどということは決してないといえるでしょう。しかし、先輩が体験を通して抱かれた考え方や、先輩という立場だからこそすることができるアドバイスとともに語られると、それは私の人生をも左右するかのようにはさ感ずる重みのある言葉となりました。

先輩はこの言葉を発せられる前に、ご自身の半生、身の上を語ってくださったのですが、それは波乱万丈と言って差し支えないような、とても順風満帆とは言えないものでした。中学校からまともに通ってはおらず、二高に合格してからも授業をまじめに受けていたわけではなく、それでも東京大学に合格し、在学中に休学してお酒に関する仕事を始め、そして大学を卒業するつもりはないとのことでした。自分はあまり物覚えのいい方ではないため先輩方全員のお名前を把握していたわけではなく、失礼ながらこの先輩のご尊名も覚えてはいたのですが、名前を出すことがなくともこの経歴だけでどの先輩のことなのか一目瞭然であることだろうと思います。それほどまでに、二高のOB・OGの中でも異彩を放つ、独特なお方でした。

お話を伺い始めてすぐは、正直とてもちゃらんぽらんのように見えてしまい、この先輩の話は本当に参考にして良いのだろうか、本当に失礼ながら疑念を抱いておりました。そのため、実際に真面目に拝聴していたとは言えず、先輩の経歴も記憶違いや勘違いが含まれているかもしれません。

しかし、先輩の体験や具体例を伴ったお話は、非常にためになるものでした。冒頭で挙げた「見かけと実質を見極めることが大切です」という言葉。この言葉は先述のようにごく当たり前のことを述べているのにすぎません。驚くべき事実や新たな発見はそういう意味では全くなく、『見かけ』や『実質』といった言葉の意味からすれば、至極当然なことです。つまり、ここで大事なのは言葉の意味そのものではなく、この言葉をどう捉えるのか、ということなのです。

先輩は、『授業中には一度も居眠りをしたことがない』という実体験を話してくださいました。恥ずかしながら、私は居眠りをすることが少ないとは言えないので、やはりそういった意識の差が進学のようなこれから先の将来で響いてくるのかと、不安と後悔を感じましたが、先輩が続けておっしゃったのは全く予想外である『居眠りをしない』理由でした。要するに、『居眠りをしてしまうようなつまらない授業には出ない』とのたまったのです。先輩は授業だけが勉強する場所ではないと考えており、独学で勉強をすることも多かったそうです。先輩が言いたいところはつまり、授業に出席していないという『見かけ』と、

勉強をしていないという『実質』は必ずしもイコールで結ばれるとは限らない、そして、授業に出席しているというだけの『見かけ』は、居眠りという行為のたった一つで勉強をするという『実質』に結びつかなくなってしまうとのことでした。これは、捉え方によっては、自分に合わない授業など受ける価値はないという、学校教育という制度を根本から否定するような考えということができるのかもしれませんが。少なくとも、学校の教師が同じように、「つまらない授業は受けなくていいんだよ」とアドバイスをすることは、不可能とは言わずともかなり難しいことであると言えるでしょう。また、最も身近な大人だと言える両親にこの考えについて話せば、お前は何のために高校の入試に受かって、何のために学校に通っているのか、授業を受けるためではないのか、と叱責されるかもしれません。勿論高校へ通う目的は人それぞれであり、授業を受けるためだけに高校へ通っているという生徒は少数派であるという可能性も否定はできませんし、『学校は勉強をするための場所ではない』という言説もある程度まかり通っている世の中ではありますが、授業がなくては学校とは言えないというのは確かです。学校でなくとも勉強はできますが、授業が受けられなくては学校ではないのです。その学校が学校たる所以をわざわざ自分から放棄しようというのは、なるほど確かに、褒められたものではありません。しかし、自分に不要な物を受容する行為が時間と能力の無駄遣いであるということのもまた事実です。学ぶことに不要な物なんてない、全てがこれからの糧となるという意見もありますでしょうが、所詮は所謂綺麗事であり、『見かけ』の話です。先輩の体験の『実質』は単なる取捨選択の結果であり、有用な授業までをも放棄する無計画で無秩序で無鉄砲なものではありません。関心の薄い授業に出ることと、興味のあることや本当に必要なことを勉強するというところを純粹に天秤にかけた結果なのです。勿論、生徒の目から見てそれを判断するということは一生を左右するかもしれないほどの危うさを孕んでいます。学校で教えていただけることに本来不要なものなどあるはずもなく、それなのに受けない授業があるということは、誰がどう見ても正しい学生の姿ではありません。しかし、それこそ『見かけ』と『実質』の話で、学校の授業で教えていただける授業の内容という『実質』と、授業という学習形態という『見かけ』とを比べた場合、大切なのは明らかに『実質』である授業の内容の方であり、それを学ぶことができるのなら、極論どのような手段でもよいといっても過言ではないのではないのでしょうか。

ただ、それがよいこと、控えめに言えば悪くはないことであつたとしても、それをすぐに行うことができるかと言われれば、できないのが人間です。なんだかんだ言いながらも大多数の、ほとんどすべての高校生はまともに授業を受けているし、そんな中で自分は一人、授業を一部受けないという選択をするということは世間一般から見て悪であるでしょう。

しかし、授業を受けないという選択はただの『見かけ』であり、『実質』は自分が正しいと思うことは曲げずに自分の意思を押し通すべきである、というところにあるのだと思います。先輩の体験は、現役高校生としては憧れや畏敬を抱くものではありませんが、それが

本当に理想の生き方ではない、ということくらいは察しがつきます。授業に出て居眠りするよりは授業に出ない方が賢いのだろうというのには納得できますが、そもそも居眠りすることなく真面目に授業を受けなさい、と言われてしまえば全く反論ができません。居眠りをしてしまうような授業だから出ない、というのは言ってしまえば弱者の発想であり、どんな授業も興味と関心を持って受けられる人の方が優れているというのは紛れもない事実です。

それでも、そんな優れた人はそうそういるものではありませんし、少なくとも私にそんなことができるとは思えません。ただ、『見かけ』と『実質』を見極めることができれば、そんな人たちに追いつくことこそできずとも、限りなく近づくことはできるはずです。今回の東京研修で得た経験を通して考える将来の理想像に迫るために、『実質』を大切に身になる勉強をしていきたいと思います。